

特別史跡三内丸山遺跡 研 究 紀 要

— 3 —

令和3年度

三内丸山遺跡センター

特別史跡三内丸山遺跡
研 究 紀 要

— 3 —

令和3年度

三内丸山遺跡センター

序

特別史跡三内丸山遺跡は、縄文時代における集落の全体像や生活、自然環境等とその変遷を具体的に解明することができる、日本を代表する縄文遺跡と評価され、平成 12 年 11 月に特別史跡に指定されました。また、平成 15 年 5 月には、三内丸山遺跡の出土品 1,958 点が重要文化財に指定されています。青森県は、三内丸山遺跡を貴重な歴史的遺産として保存するとともに、遺跡の整備と一般公開を行っており、多くの方々に三内丸山遺跡を見学していただいております。

令和 2 年度は、第 44 次発掘調査として遺跡北側地区および旧都市計画道路予定地北側の調査を実施しました。また、企画展、さんまる縄文体験などを開催し、三内丸山遺跡を中心とした縄文文化の魅力と重要性を広く発信してまいりました。

この紀要は、令和 2 年度の三内丸山遺跡の調査研究、活用事業の概要についてまとめたものです。本書が三内丸山遺跡の理解や埋蔵文化財の保護や研究に寄与できれば幸いです。

刊行に当たり、三内丸山遺跡の保護と活用に御支援、御指導を賜りました皆様に対し深く感謝申し上げます。

令和 4 年 3 月

三内丸山遺跡センター

所 長 田中 道郎

目 次

I 令和2年度の発掘調査について	1
II 研究ノート	
1 「三内丸山遺跡の有孔円形土製品」	
業天 唯正（三内丸山遺跡センター）	10
2 「東北地方北部の石材環境をめぐる円筒下層式期の石槍生産」	
山地 雄大（三内丸山遺跡センター）	16
III 特別研究推進事業成果概要報告	
共同研究	
「円筒土器文化における集落の実態をさぐる	
－時間差・地域差・存続期間の比較研究－」	
三内丸山遺跡センター	33
IV 三内丸山遺跡出土品の保存修理事業について	40
V 三内丸山遺跡出土品の再整理事業に係る出土品紹介	
高橋 哲（三内丸山遺跡センター）	45

I 令和2年度の発掘調査について

三内丸山遺跡では、遺跡の全体像や、集落構造の変遷の解明、保存・活用のための資料収集を目的とした確認調査を「三内丸山遺跡発掘調査計画」に基づき継続して行っている。

令和2年度に実施した第44次発掘調査は、第3期発掘調査計画の5年目にあたり、令和元年度に引き続き遺跡北端部の調査と今年度新たに旧都市計画道路予定地北側の調査を行った（図1）。調査期間は、6月1日から11月20日まで、調査面積は約336㎡である。

なお、本事業は国庫補助事業を受けて実施した。

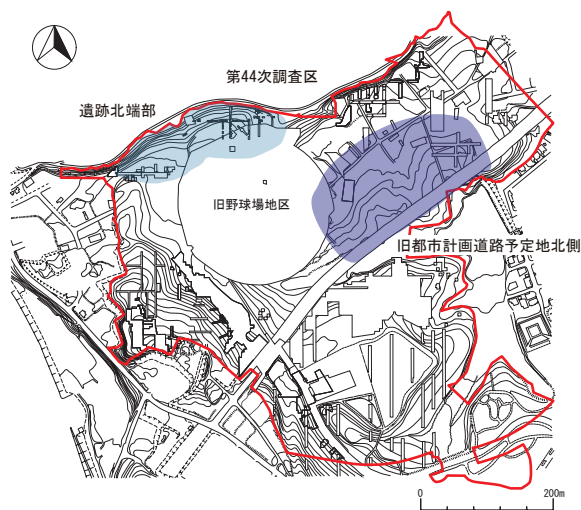


図1 第44次調査区の位置

1 調査の目的等

- (1) 遺跡北端部における2条の溝状遺構の時期、規模、構造の解明
- (2) 旧都市計画道路予定地北側の遺構分布状況の確認

2 調査の概要

今年度新たに縄文時代と古代以降の土坑10基、古代以降に帰属する可能性のある溝跡7条、

縄文時代の埋設土器1基、縄文時代とそれ以降に帰属する可能性のあるピット176基、その他の遺構として13基を検出した。

主な出土遺物は、段ボール箱で約35箱の縄文土器・石器・土製品・石製品等が出土した。

以下、調査目的ごとに概要を記述する。

- (1) 遺跡北端部における2条の溝状遺構の時期、規模、構造の解明

① 溝状遺構の時期

遺構内堆積土の状況及び遺物の出土状況から縄文時代中期末葉以前に帰属する可能性が高まった。

第315号溝状遺構では、近世以降に削平を受けているため、第Ⅱ層の被覆を確認できなかったが、遺構内の堆積土として第Ⅲ層に近似する土が堆積していることを確認した。

第316号溝状遺構では、Uトレンチの土層断面等により、溝状遺構埋没後に第Ⅱ層が堆積し、遺構内には第Ⅲ層相当の土が堆積していることを確認した（写真1・図6）。第Ⅱ層の下部から大木10式併行期の土器が出土している。これにより、少なくとも縄文時代中期末葉以前に埋没した遺構であることが分かった。



写真1 第316号溝状遺構内の堆積状況

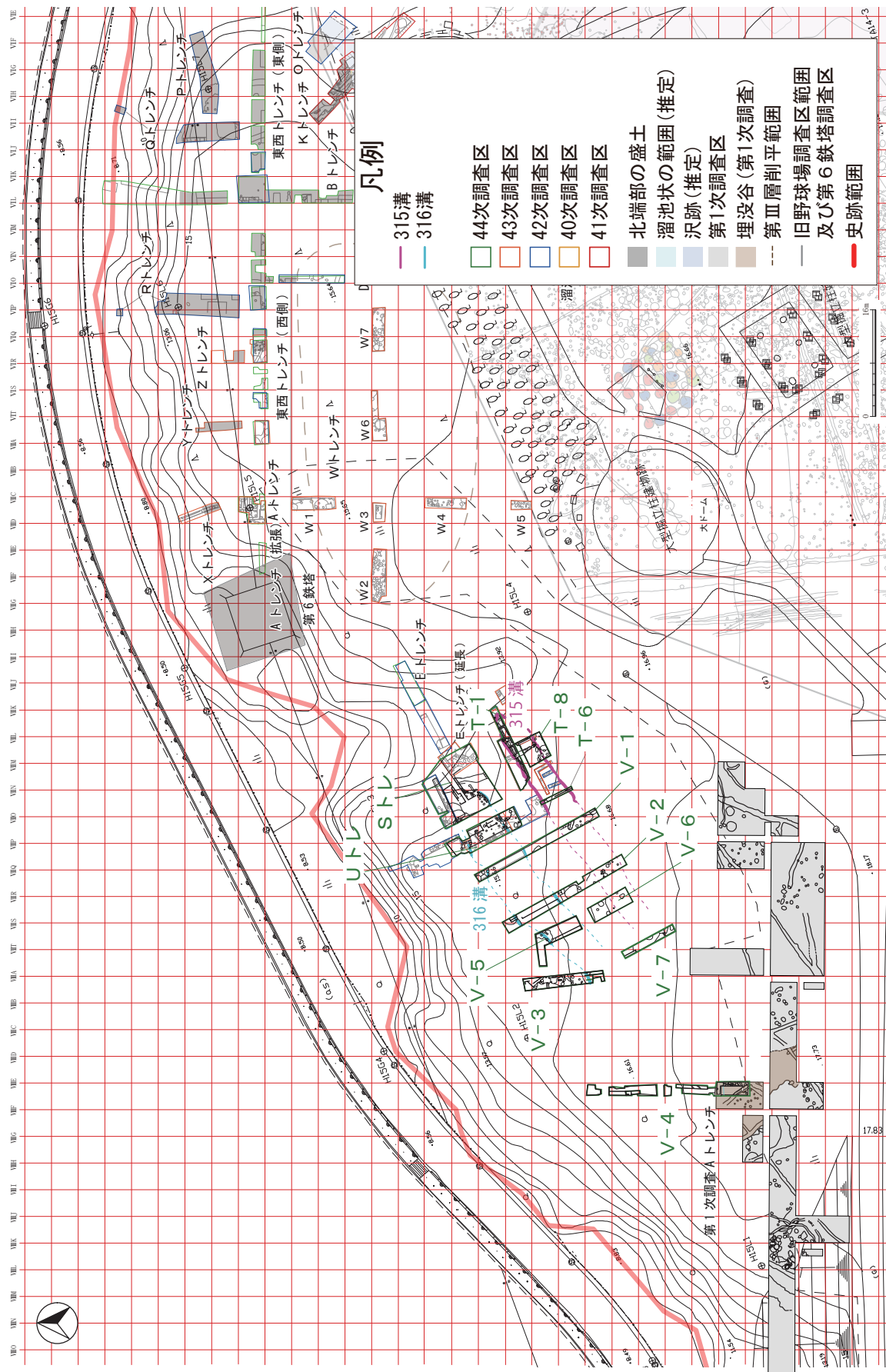


図2 第44次調査区遺構配置図 (遺跡北端部)

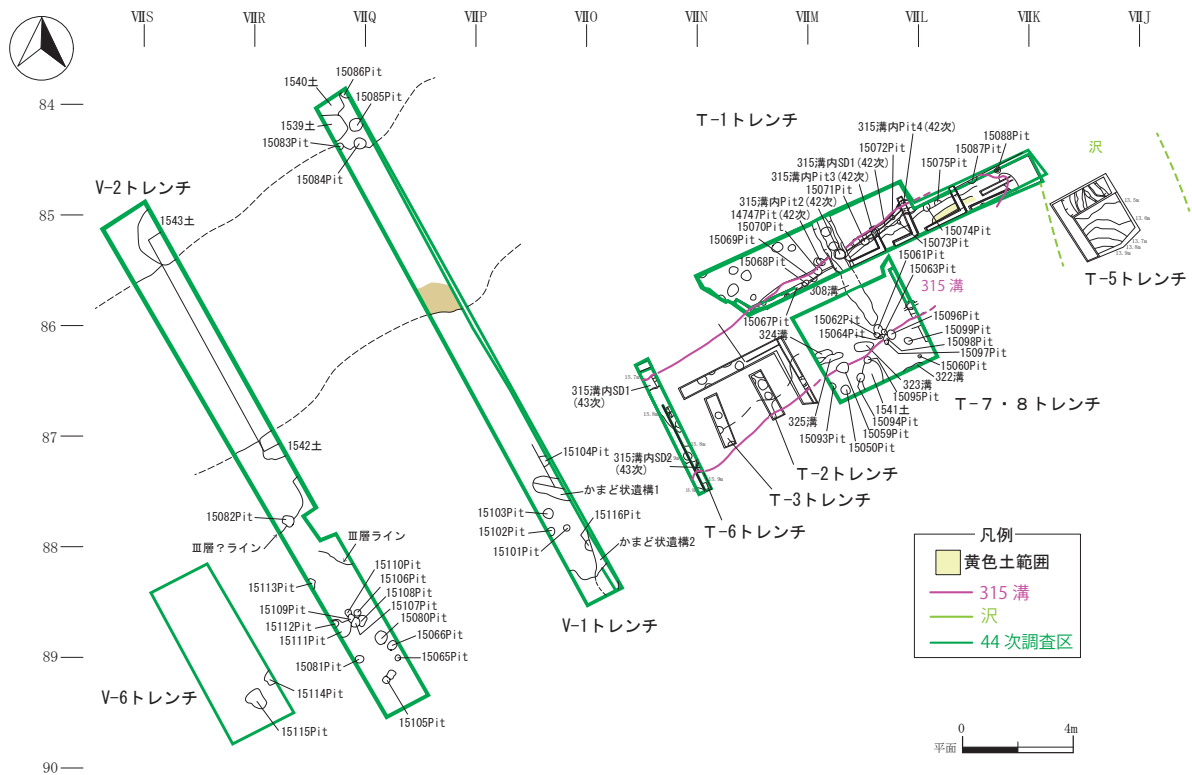


図3 第315号溝状遺構（平面図）

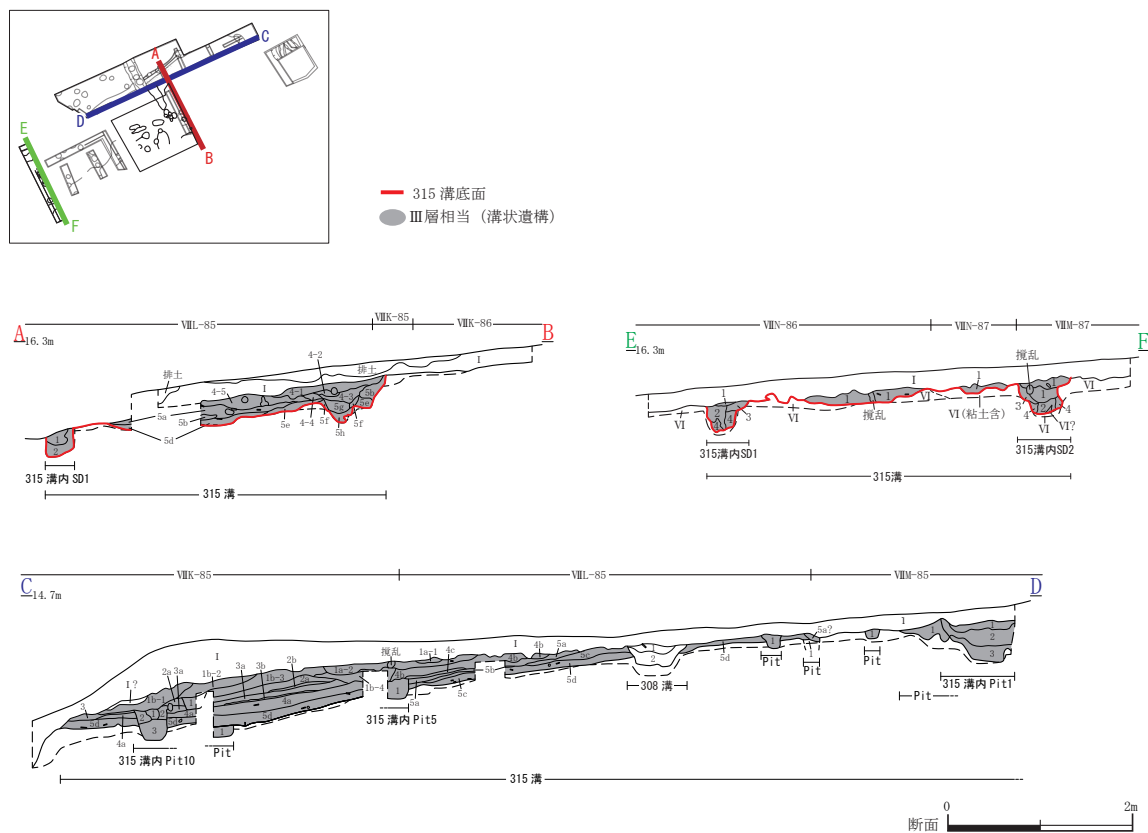


図4 第315号溝状遺構（セクション図）

② 溝状遺構の規模

第315号溝状遺構は、Tトレンチの範囲で、平面プランを確認し、幅4mで全長15m以上の規模があることが判明していた（写真2）。V-1トレンチより西側の範囲で、延伸状況を確認した結果、V-1、2、6トレンチともに地山まで削平を受けている状況であったため、この範囲での確認には至らなかった（図3）。

第316号溝状遺構は、SトレンチからV-3トレンチの範囲で遺構の平面プランを断続的に確認し、最大幅7mで少なくとも全長30mの規模であることを確認した。さらに西側に延伸することは確実であると考えられる（図5）。

さらに西側に位置するV-4トレンチに平成7



写真2 第315号溝状遺構検出状況
(T-1・8トレンチ 西から)



写真3 第316号溝状遺構検出 (S・Uトレンチ)



写真4 第316号溝状遺構検出状況
(V-2トレンチ 北から)



写真5 第316号溝状遺構延伸状況
(右：V-2トレンチ・左：V-5トレンチ)

年度の第1次調査区のAトレンチの一部を含めて調査した。その結果、溝状遺構の可能性のある柱穴列を検出している。どちらの溝状遺構に帰属するか、判断できなかった（写真7）。

③ 溝状遺構の構造

第315号溝状遺構では、上部が削平を受けているため、全体を把握できていないが、溝の両端に柱穴列が伴う構造であることを確認した。柱穴列の各柱穴には掘り方の規模や深さに違いが見られる。特に深い柱穴に関しては、おおむね1.5mの間隔で並んでいる点をT-1トレンチの範囲で確認している。

第316号溝状遺構では、底面の幅が1.6mあり、両側に緩く立ち上がる逆台形の断面形状であることを確認した。東端部（S・Uトレンチ）

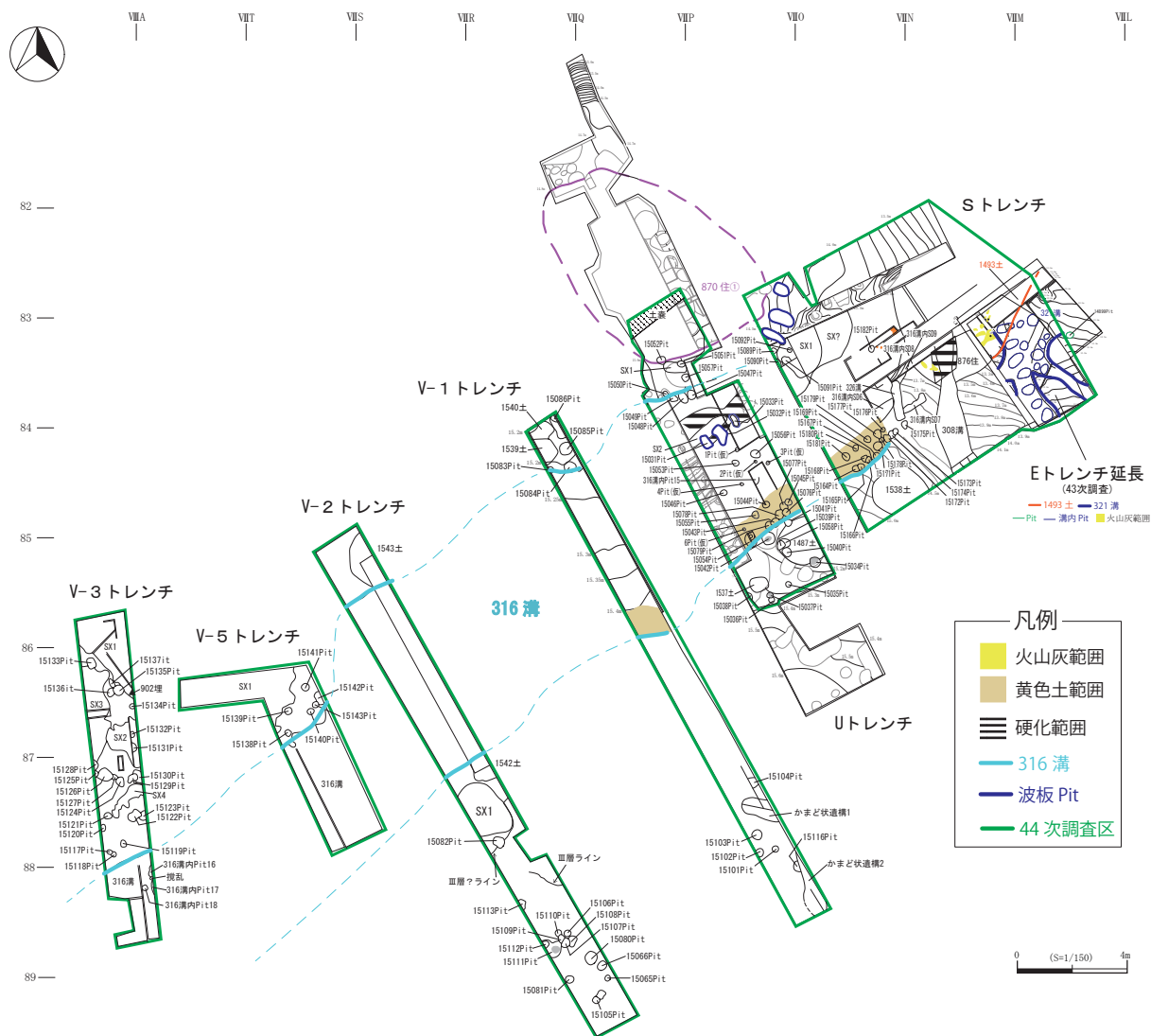


図5 Aトレンチ平面図・セクション図



写真6 第316号溝状遺構検出状況
(V-3トレンチ 南東から)



写真7 V-4トレンチおよび第1次調査区Aト
レンチ調査状況(南から)

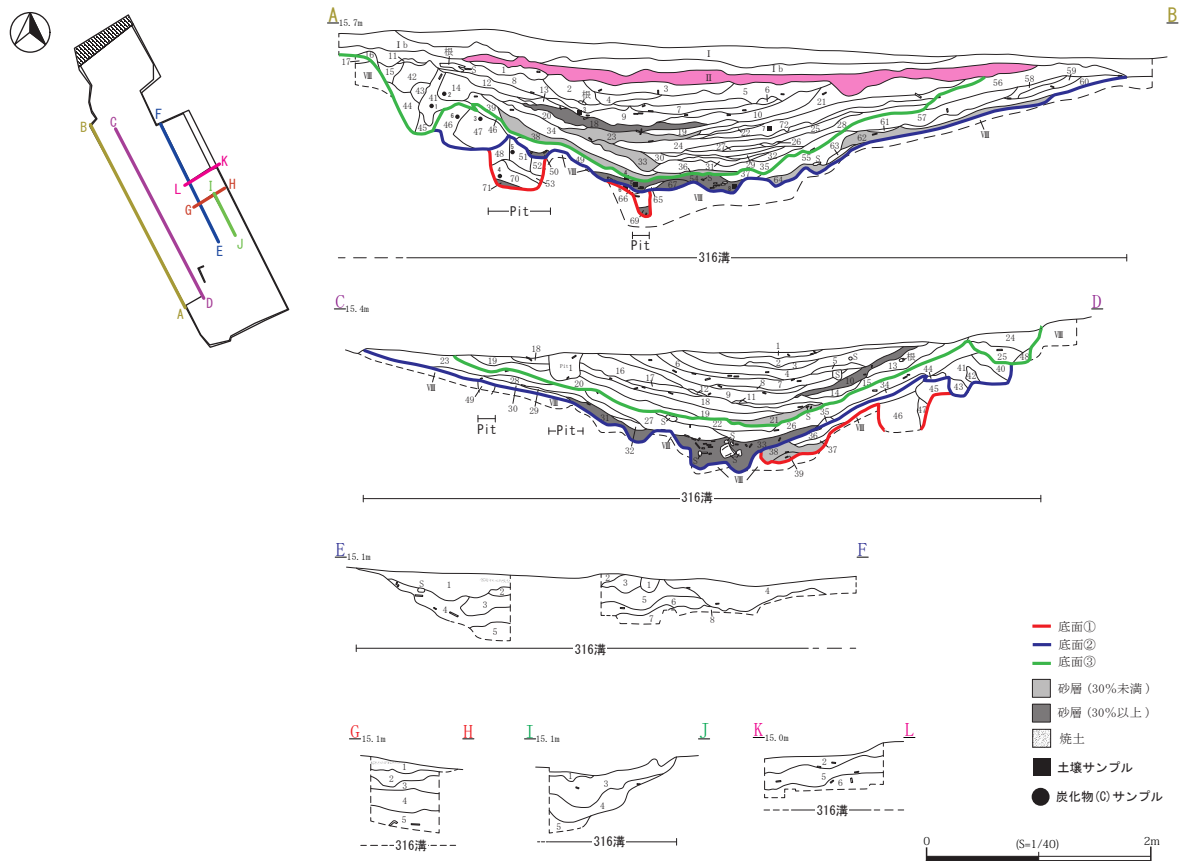
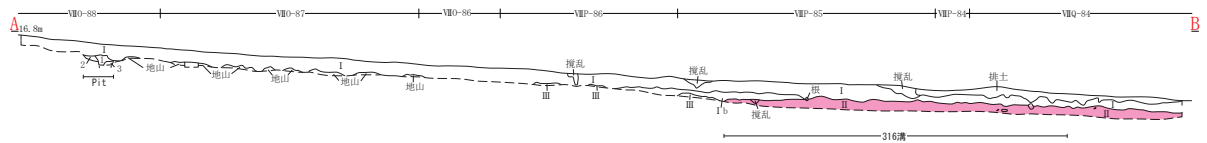
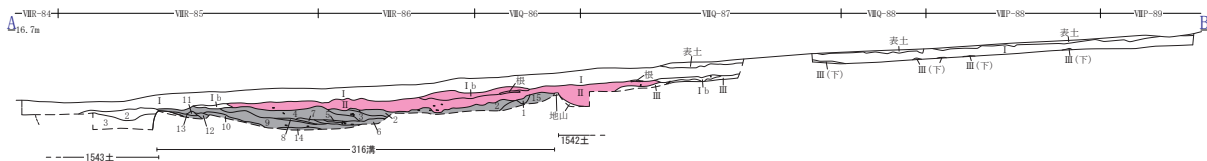


図6 Uトレンチセクション図

V-1 トレンチ



V-2 トレンチ



V-6 トレンチ

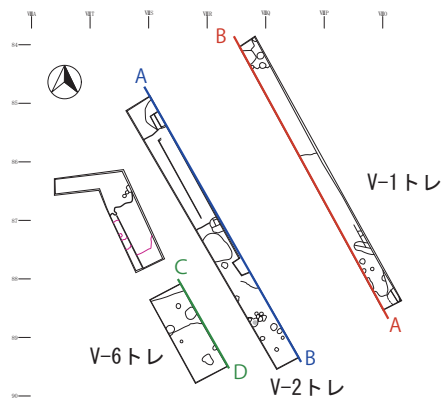
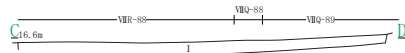


図7 V-1・V-2・V-6トレンチセクション図

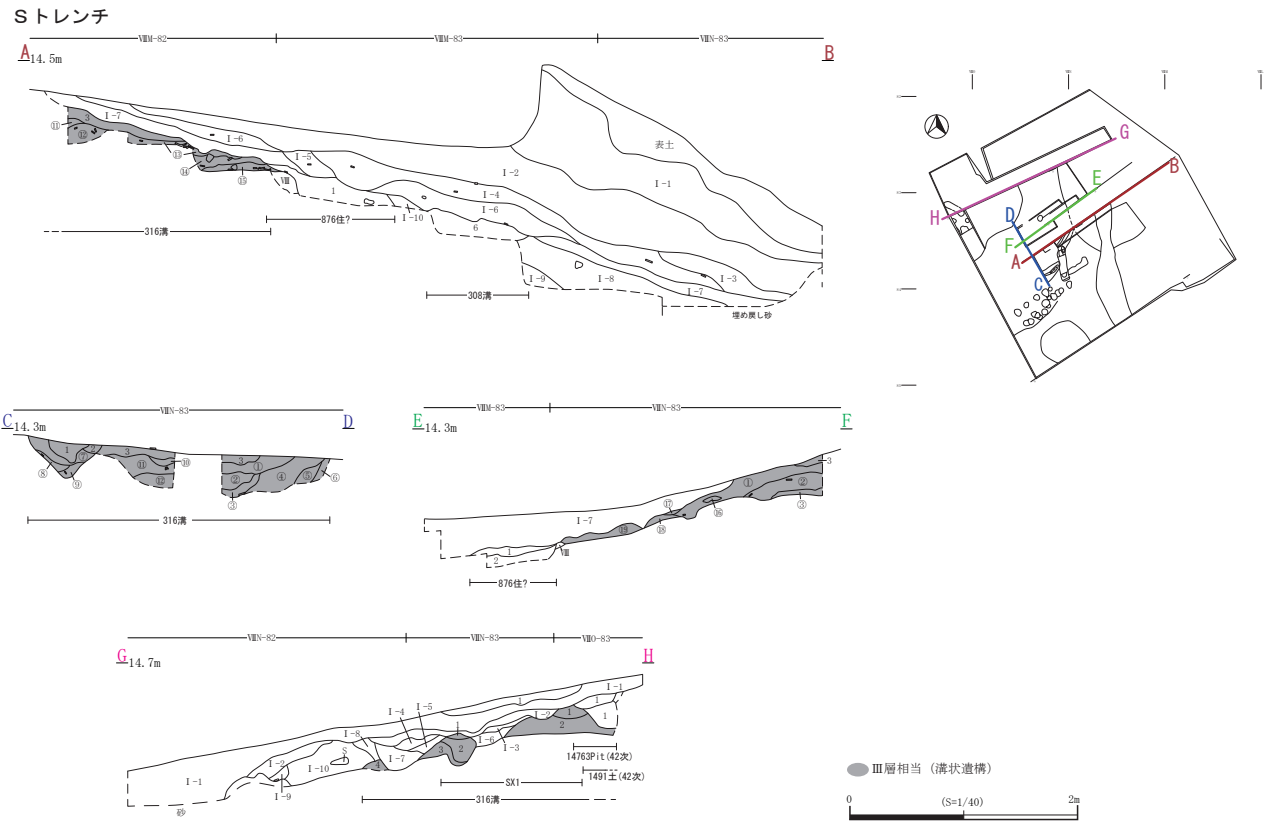


図8 Sトレンチセクション図

とそれ以外の部分では、遺構の構造が異なっている可能性があることも判明した。

東端部 (U トレンチ) では、溝の両端に柱穴列が伴い、底面には小溝を複数条件う構造である。それに対して、V - 3 トレンチでは、柱穴列を明瞭に確認できないなど、溝状遺構の両端すべてに柱穴列が伴うかどうか明確にできなかった。

第316号溝状遺構全体として、西側から東側の沢地形に向かって傾斜している点も確認した。底面の標高は、V - 3 トレンチからS トレンチまでの30mの距離で1.7m下がっていることが分かった。特に沢地形に近い東端部では、勾配が急になる点も確認している。

④ 溝状遺構の底面及び柱穴列の再構築について

第316号溝状遺構の東端部 (U トレンチ) では、土層の堆積状況の確認と平面的な調査を通じて、底面及び柱穴列を複数回にわたり構築してい

る状況が判明した (図6)。

各構築面は砂層の下面と認識した。構築後、砂層が堆積し、炭化物を含む土 (第III層に近似) によって、柱穴列までを埋め、その面を利用して新たな構築面が形成される状況を確認した。



写真8 第316号溝状遺構の柱穴列
(U トレンチ南側)

(2) 旧都市計画道路予定地北側の遺構分布の確認

道路跡と土坑墓列に近い区域に2m×10mの調査区を1箇所設定し、調査を行った。トレンチの大半が攪乱を受けていることが判明し、ピット3基のみを検出した。竪穴建物跡の分布は確認できなかった(図10)。



写真9 TK-1 トレンチ遺構確認状況(北西から)

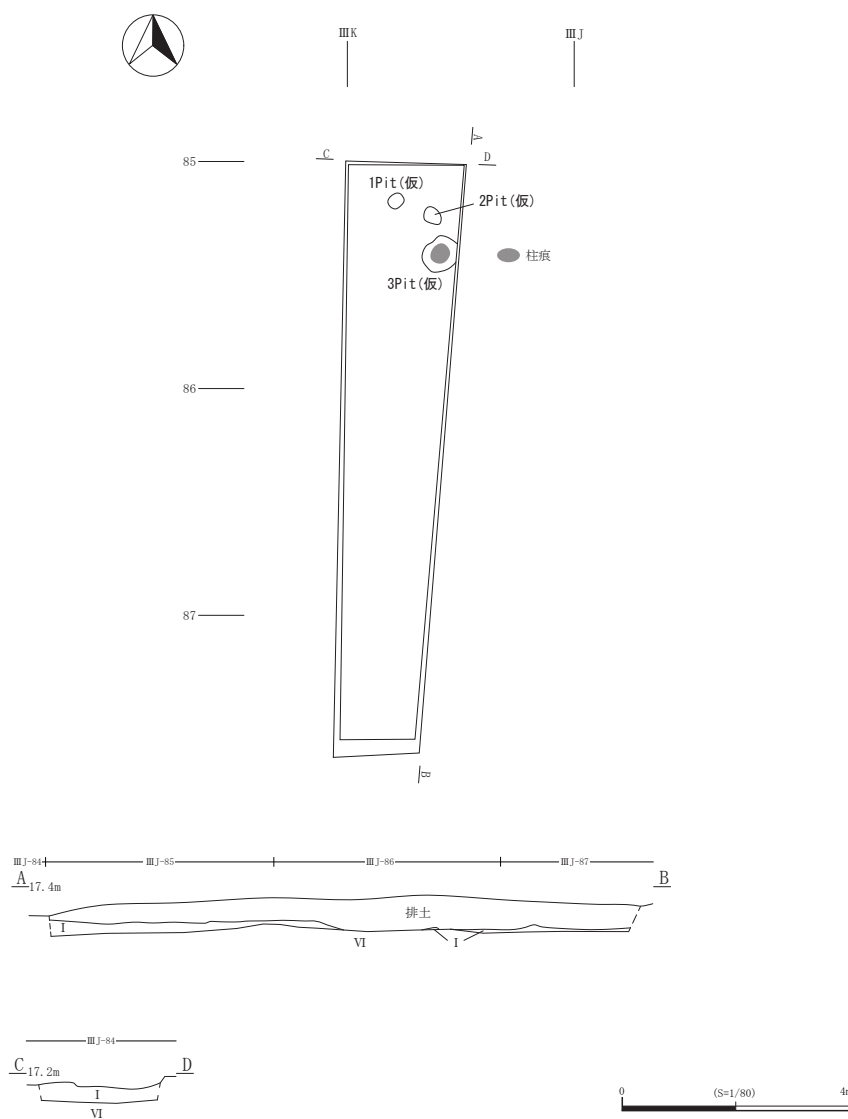


図10 TK-1 トレンチ平面図・セクション図

II 研究ノート

1 三内丸山遺跡の有孔円形土製品

1 はじめに

三内丸山遺跡における縄文時代の土製品については、ミニチュア土器、土製耳飾、円盤状土製品など 10 種類以上がこれまで発掘調査報告書に掲載されている。総括報告書第 1 分冊ではこれらの土製品について時期別にまとめられ、その特徴について整理された（青森県教育庁文化財保護課編 2017）。続く第 2 分冊では、数量的なまとまりを持つ土製品を対象として、円筒土器文化圏における時間的空間的な検討がなされた（青森県教育庁文化財保護課編 2018）。

縄文時代の土製品は、有孔のものについては垂飾としての利用が想定される場合が多いが、石製垂飾品の模倣品や代用品として扱われることもある。また、有孔の土製円盤については、装身具のほか、紡錘車など多様な用途が想定されている（大塚・戸沢編 1996）。

一方で三内丸山遺跡の有孔土製品をみると、逆 V 字形、球形、紡錘形などの多様な形状がみられるだけでなく、大小の違いもあり、有孔という特徴でもって一律に垂飾と認めにくいものが含まれる。また、土器片を加工した有孔の土製円盤は、比較的出土量が多く、大きさに幅がみられる一方で土器片を利用しないものもみられる。

本稿は、三内丸山遺跡の有孔土製品についての特徴を踏まえ、周辺地域の状況と比較しながら、その性格について若干の検討を行うものである。

2 対象資料

有孔土製品のうち、垂飾に加えて孔に棒を通して回転させる機能を持つまとまりとして捉えるこ

業天 唯正（三内丸山遺跡センター）

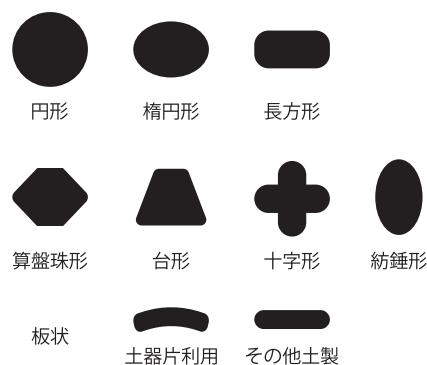


図 1 側面の形状による有孔土製品の分類

とが可能な平面形が円形を呈するものを対象とする。

これまでに報告されている円形の有孔土製品は前期中葉から中期末葉にかけてのものが 200 点ほどあり、側面形状に基づいて図 1 のように大別した。形状ごとの点数は表 1 のとおりである。なお、総括報告書で具体的な変遷や先行研究により評価が定まっている鼓状や滑車形の耳飾りについては対象としていない。

表 1 資料点数

側面形	点数
円形	31
楕円形	5
長方形	8
算盤珠形	11
台形	12
十字形	2
紡錘形	40
板状	75
合計	184

3 資料の特徴（図 2）

（1）円形

全体形が球状になるものである。北の谷と北盛土から出土したものが大半である。重量別にみると、およそ 10 グラム未満を小型品とすることができる。小型品は、北盛土の同一グリッドのⅢ層から 10 点以上報告されており、連ねて使用して

いた可能性がある。

10 グラムを超えるものは北盛土や南盛土から出土しており、中期に帰属するものとみられるが、細別時期は不明である。10 グラム以下のものは北の谷Ⅲ c-3 層、北盛土Ⅲ a-9 層から出土しているものがあることから、前期中葉から中期前葉に位置付けられるものが含まれる。

(2) 楕円形

1 点を除き、北盛土と南盛土から出土している。重量は 10 グラム以上あり、大きいものでは 35 グラムほどある。これらは中期のものとみられるが、細別時期は不明である。

(3) 長方形

上下の面がおおむね平坦になるものである。北盛土と南盛土から出土しているものが大半である。重量は 10 グラム未満から 20 グラム以上までと幅がある。北の谷出土例（図 2-9）は中心からずれた箇所に孔があり、そこから縁辺に向かって両面に文様があることから、垂飾品の可能性がある。長方形には北の谷Ⅲ c-4 層や、中期末葉の竪穴建物跡から出土しているものがあり、前期・中期を通じてみられる形状である可能性がある。

(4) 算盤珠形

北盛土・南盛土から出土しているものが大半である。重量は 10 グラム未満から 30 グラム未満までと幅がある。全面に刺突文を施す個体が 15 グラム以下に認められるほか、大型のものには稜線上に刺突文がめぐらされるものがある。中期にみられる形状であると考えられる。

(5) 台形

全体形が截頭錐形や円錐形、またはそれに類するものを含めた。孔の形状によってさらに細分されるものである。北盛土からの出土が多く、重量は 15 グラム未満と 25 グラム以上に分かれる。大型品を含め中期の所産と考えられるが、小型品については北盛土Ⅲ a-8 層・Ⅲ a-4 層から出土していることから、中期の前葉から後葉に比定でき

る。

(6) 十字形

報告例は 2 点のみで、紡軸と紡錘が合わさったような形状をしている。南盛土の同一グリッド、同一層からの出土である。略完形の重量で 15 グラム前後ある。中期に帰属するものと考えられる。

(7) 紡錘形

40 点ほどこの形態に含めたが、断面と平面形によってさらに細分が可能である。全て無文である。北盛土・南盛土からの出土が主体だが、北の谷のものからもある。重量は一点を除き 20 グラム未満で、40 グラムを超えるものが 1 点だけある。細別時期がわかるものは、中期前葉のものが多い。

(8) 板状

ア 土器片素材

本稿では有孔土器片円盤とするもので、今回の分析対象では最も数量が多い。北盛土からの出土が主体であるが、竪穴建物跡、土坑、北の谷からの出土もある。重量は 20 グラム前後のものが多く、細別時期がわかるものはそれほど多くないものの、前期中葉から中期前半に比定できるものが多い傾向にある。

イ 土製（土器片利用以外）

本稿では有孔土製円盤とするもので、(3) の長方形とは明確に分離できないものがあるほか、環状の土製品に近い孔の大きさのものが含まれる。北盛土からの出土が大半だが、竪穴建物跡からのものもある。重量は 5 グラム未満にまとまりがみられ、30 グラム超の個体も認められる。小型品は、刺突が環状に巡る文様がみられるものが多い。中期にみられる形態と考えられ、細別時期では中期前葉と中期中葉に帰属するものがある。

4 県内の資料

ここでは、三内丸山遺跡と同時期の遺跡のうち、有孔円形土製品の出土が一定量みられる遺跡につ

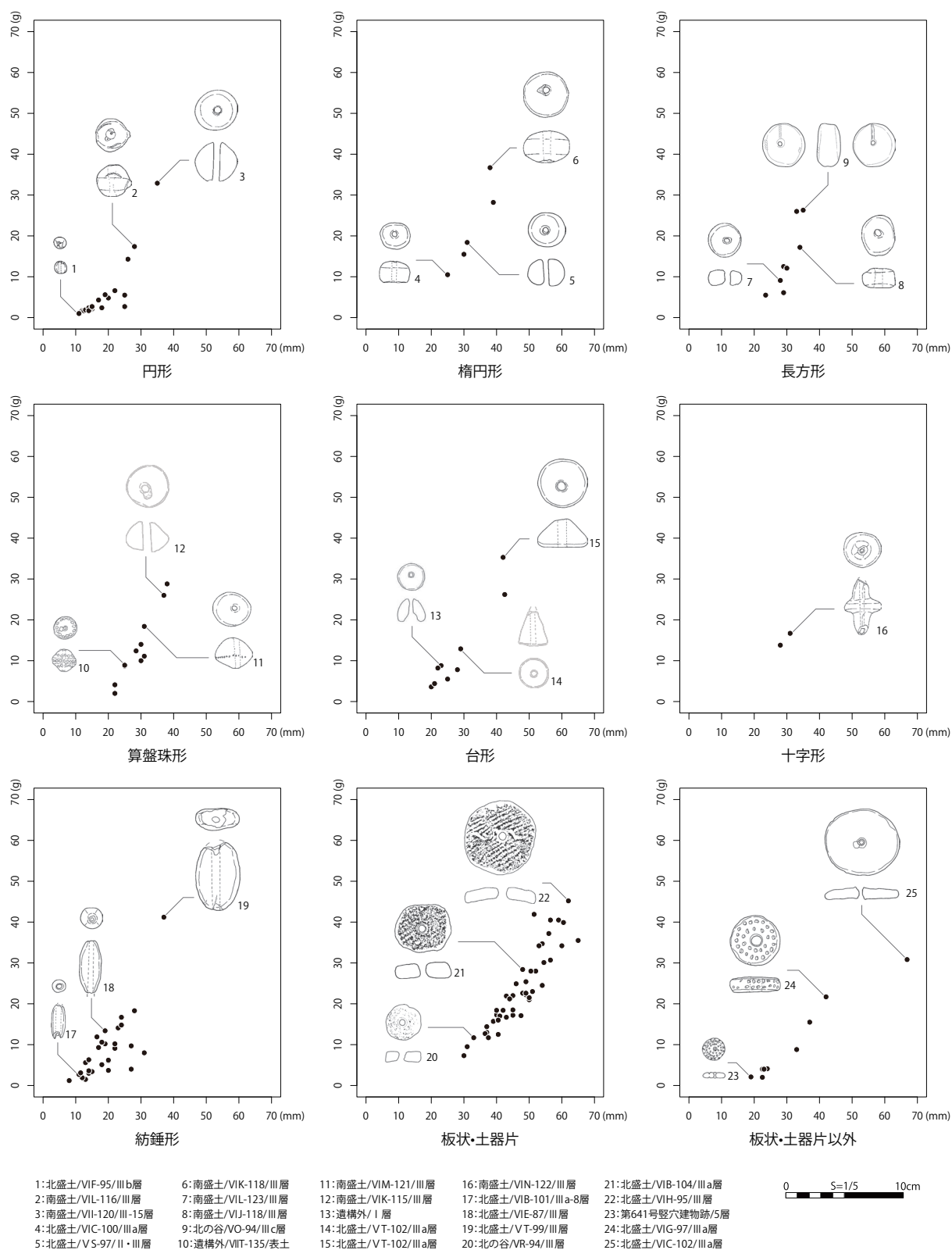


図2 有孔土製品の直径と重量

いて取り上げる。

(1) 西目屋村水上 (2) 遺跡

50点ほどの報告がある。有孔土器片円盤が主

体であり、中期後葉から中期末葉に位置付けられ

る算盤珠形、台形、紡錘形がわずかにあるのみで

ある。

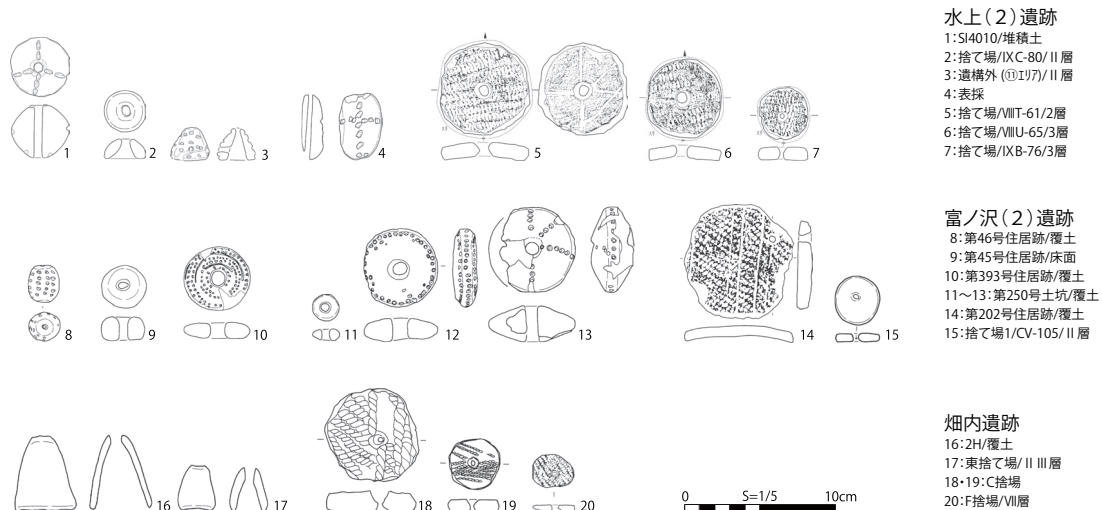


図3 青森県内の有孔土製品

有孔土器片円盤は竪穴建物跡や捨て場から出土している。三内丸山遺跡出土例よりも大型のものが目立ち、重さ 25 グラム前後が主体である。帰属時期は大きく前期後葉と、中期後葉から中期末葉の 2 時期がみられる。また、前期から中期へと時代が降るにつれて、やや軽いものが多くなり、出土例が減少する傾向がある。

(2) 六ヶ所村富ノ沢(2)遺跡

9 点報告されている。球形、長方形、楕円形、算盤珠形、有孔土器片円盤があり、刺突や沈線で文様が描かれるものが半数ほどある。大型に属するのは算盤珠形である。これらは、竪穴建物跡や土坑から出土しており、中期中葉から中期後葉に位置付けられる資料である。なお、有孔土器片円盤は中心からずれた位置に孔があげられているものがみられる。

(3) 八戸市畑内遺跡

11 点報告されている。台形と有孔土器片円盤がある。竪穴建物跡と捨て場から出土しており、台形は 30 グラム近い大型のもの、有孔土器片円盤は大型から小型のものがみられる。前期中葉から前期後葉にかけての資料である。

5 予察

(1) 有孔円形土製品の消長

これまで取り上げた資料をもとに、形状別の重さと消長を整理すると図 4 のようになる。ここでは便宜的に 20 グラム以上を大型品としてしている。なお、今回は網羅的に資料を扱わなかったため、今後の資料の追加によって修正等が加わる可能性がある。

円形のものは、前期はいわゆる土玉などの小型品に限られ、大型品は中期以降に加わるものである。楕円形は大型から小型まであり中期に認められる。長方形のものは前期・中期を通じてみられるが、やや大型ものは前期と中期末葉にみられる。

算盤珠形は中期に出現する形態で、大型品は中期中葉から中期末葉までみられる。三内丸山遺跡や水上(2)遺跡例では球状に近いが、太平洋側ではやや扁平な形状である。稜線上や孔から放射状に広がる刺突文が共通する。

台形やそれに類する形状は前期中葉から中期後葉まで認められ、大小の区別がみられる。断面形がハの字状になる傘形の大型品は前期からあり、台形は中期に出現する。側面に孔がある個体もある。十字形は取り上げた資料のほか、秋田県鹿角市天戸森遺跡で確認されており、中期後半に位置

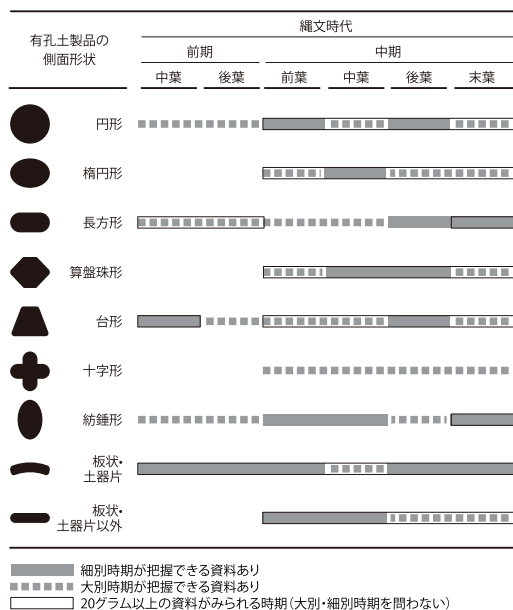


図4 有孔土製品の消長

づけられる可能性がある。また、紡錘形は中期を主体としたものであると考えられる。

有孔土器片円盤は、前期中葉から中期を通じてあるが、時代が降ると報告例が少なくなる。太平洋側の中期を代表する拠点集落である富ノ沢(2)遺跡でも中央に孔があるタイプの報告例はなく、有孔土器片円盤の利用が後期に向かって低調になっていくことを反映している可能性がある。

(2) 大型品の位置付け

台形・長方形・有孔土器片円盤を除く有孔円形土製品の全体的な傾向として、重さ10グラム未満の小型品だけでなく、20グラム以上の大型のものが共通して認められ、それらが中期に出現している点が挙げられる。

これらの大型品の用途としては、石製装飾品の代用品、装飾品、弾み車などが想定される。

ア 石など他の素材の代用品

球形や楕円形などにヒスイ製大珠に似通った形状はあるが、算盤珠形や台形については、そうした状況はみられないため、全てが何らかの製品の模倣品や代用品として製作された可能性は低い。

イ 装飾品

孔が中心からズレた位置にあり、文様が施される事例(図2-9)や、側面に孔があるもの(図3-9)は装飾品として使用された可能性がある。富ノ沢(2)遺跡のフラスコ状土坑(第250号土坑)からは算盤珠形の小型品と大型品が覆土中から出土している事例がある(図3-11・12・13)。本土坑を墓とするのであれば、装飾品としてセットで使用されていた可能性があるが、出土状況が不明で評価が難しい。

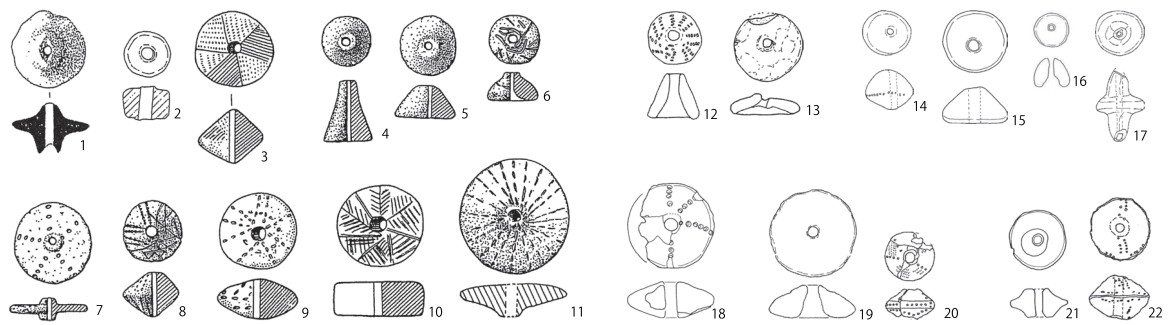
ウ 弾み車

舞錐による穿孔、紡錘による糸つむぎなど回転運動を伴う作業の弾み車としての利用である。回転運動による穿孔の事例としては、水上(2)遺跡の有孔土器片円盤の裏面にある同心円状の線状痕(図3-5)や三内丸山遺跡のヒスイ製品に残る管錐の痕跡の事例などがあげられ、弓錐ないしは舞錐による穿孔技術の存在が確認できる。

北陸地方に多く出土する有孔球状土製品をヒスイ製品の穿孔に用いられた弾み車とみなす考えもある(小島1983)。しかし、有孔球状土製品は数百グラムの重量があり、また穿孔は弓錐でも可能である。また、攻玉を行っていた三内丸山遺跡以外にもみられる形態があることから、積極的に関連づけるにはさらなる検討が必要である。

紡錘に関しては、直径4センチメートル内外の有孔円盤について、縄文時代にもそれがみられるとしつつも、織布の存在が明らかな弥生時代以降のものが紡錘車とされているが(佐原2005)、有孔土器片円盤を除く九州地方や南関東の縄文時代の後期と晩期の有孔土製円盤を紡錘車とする見方がある(中間1985)。

一方、有孔土器片円盤について紡錘車として積極的に評価する意見もある(皆川2001)。また、藤田(1998)は有孔球状土製品を紡錘車とし、網糸や釣糸、ヒスイ玉を通す飾り紐にヨリをかける道具とみなしている。このように、日本列島で



ザイサノフカ文化の紡錘車

1:シェクチャーエヴォ 2:ザイサノフカ7 3:ザイサノフカ1 4~10:ヴァレンチン地峡
11:ウ・ドロギ
※古澤2018 図108・109をもとに作成

円筒土器文化圏の有孔土製品

[北海道] 12・13:八雲町栄浜1遺跡
[青森県] 14~17:三内丸山遺跡 18:六ヶ所村富ノ沢(2)遺跡
[岩手県] 19:替代村力持遺跡 20:二戸市御野遺跡
[秋田県] 21:鹿角市天戸森遺跡 22:秋田市地蔵田遺跡

0 5=1/5 10cm

図5 周辺地域との比較

は縄文時代の紡錘車を積極的に認定する見方と慎重な立場がある。なお、三内丸山遺跡の大型品の重量は弥生時代の紡錘車の重量と比べても大きな差はみられない。

新石器時代の東北アジアでは、これまでみてきた算盤珠形や台形、十字形の有孔土製品は小型のものは装飾品の可能性はあるとされながらも、紡錘車として扱われており、特に、算盤珠形の紡錘車は広範囲に広がりを見せている（古澤 2018）。例えば、縄文時代の中期～後期に相当する南沿海州のザイサノフカ文化の土製紡錘車と円筒土器文化の有孔円形土製品を比べても、相似する形態が認められる（図5）。機能的な要請が影響関係によるものかはさておき、三内丸山遺跡にみられるような多様な有孔円形土製品のあり方は、こうした視点からもさらに検討を進める必要がある。

6 終わりに

本稿では有孔円形土製品について、形状や重さの整理を行い、回転運動に伴う作業に利用された可能性について提示した。今後はヒスイ製作や繊維利用の視点から、円形の有孔石製品などを資料的に補完していくと共に、有孔土器片円盤の時期的変遷を注視しながら検討を進めていくこととしたい。

引用・参考文献

- 大塚初重・戸沢充則編 1996『最新日本考古学用語辞典』, p.244, 柏書房
- 小島俊彰 1983「有孔球状土製品」『縄文文化の研究』9, pp.141-148
- 佐原真 2005「手から道具へ・石から鉄へ」『道具の考古学』金関恕・春成秀爾（編）佐原真の仕事2, pp.1-79, 岩波書店
- 中間研志 1985「紡錘車の研究—我国稲作農耕文化の一要因としての紡織技術の展開—」『石崎曲り田遺跡』Ⅲ, pp.105-160
- 皆川洋一 2001「北海道中央・南部における縄文時代早期後半の諸問題」『渡島半島の考古学』南北海道考古学情報交換会 20周年記念論集, pp.37-59
- 藤田富士夫 1998「縄文の紡錘車」『縄文再発見 日本海文化の原像』, pp.175-218, 大巧社
- 古澤義久 2018「第5章 東北アジア先史時代紡錘車の変遷と地域性」『東北アジア先史文化の変遷と交流』, pp.187-215, 六一書房
- 青森県教育庁文化財保護課 2017『三内丸山遺跡 44 総括報告書第1分冊』青森県埋蔵文化財調査報告書 588
- 青森県教育庁文化財保護課 2018『三内丸山遺跡 44 総括報告書第2分冊』青森県埋蔵文化財調査報告書 588
- ※発掘調査報告書は紙幅の関係で割愛した。

2 東北地方北部の石材環境をめぐる円筒下層式期の石槍生産

1 研究の背景

本研究の目的は、東北地方北部における縄文時代前期中葉～後葉に帰属する石槍（註1）について、（1）形態的な比較を行い、（2）それらの空間的な分布状況を検討していくことで、円筒下層式期の石槍生産と石材環境との関連性について検討することである。

縄文時代草創期を迎えると、東日本を中心として大形の尖頭器が活発に生産され、それ以降多くの地域で低調となるなか、東北地方では少なくとも縄文時代中期にまで石槍生産が継続する。なかでも、縄文時代前期中葉から中期に東北地方北部から北海道南部にかけて展開する「円筒土器文化」（村越 1974）では、円筒下層式期を中心に石槍が多く組成することが指摘されてきた（渡辺 1969、工藤 1975）。

多く組成することが指摘されながらも、円筒下層期の石槍生産をめぐる議論はなおも低調である。

とりわけ、石槍（尖頭器）をめぐるのは、石材環境との関連性のなかで議論が進められてきたが、円筒下層式期では、こうした観点からはわずかに指摘されるに過ぎない（齋藤 2018）。

石槍をはじめとした両面調整の石器は、大形の原石から両面加工を繰り返し行って、石器製作を進めていくなど、まとまった量の石材確保が必要となることが見込まれる（図1）。接合資料が示すように長大な原石から石槍1点しか製作されないといった極めて浪費的な側面がある。それゆえ、縄文時代草創期の大形尖頭器では石材産地で尖頭器生産が進められる点が指摘されてきた（藤山 2017）。

円筒土器文化圏のなかでも東北地方北部では、

山地雄大（三内丸山遺跡センター）

珪質頁岩が石材として選択されるが、その産地の多くが日本海側に偏在している（秦 2007 など）。各地域で十分に石材を確保できるわけではないにも関わらず、各地域で石槍が組成している。

さらに、円筒下層式期を迎えると、日本海側、太平洋側ともに集落の形成が進み、居住域だけでなく、捨て場や墓域、貯蔵穴群など様々な施設から構成される大規模な集落が形成される。各地でよりいっそう土地に定着的な暮らしが進められていく状況にあり、珪質頁岩産地から離れた地域では、その産地への訪問は極めて限定的となることが想定される。

こうした状況のなか、円筒下層式期の石槍生産はどのように進められていたのだろうか。

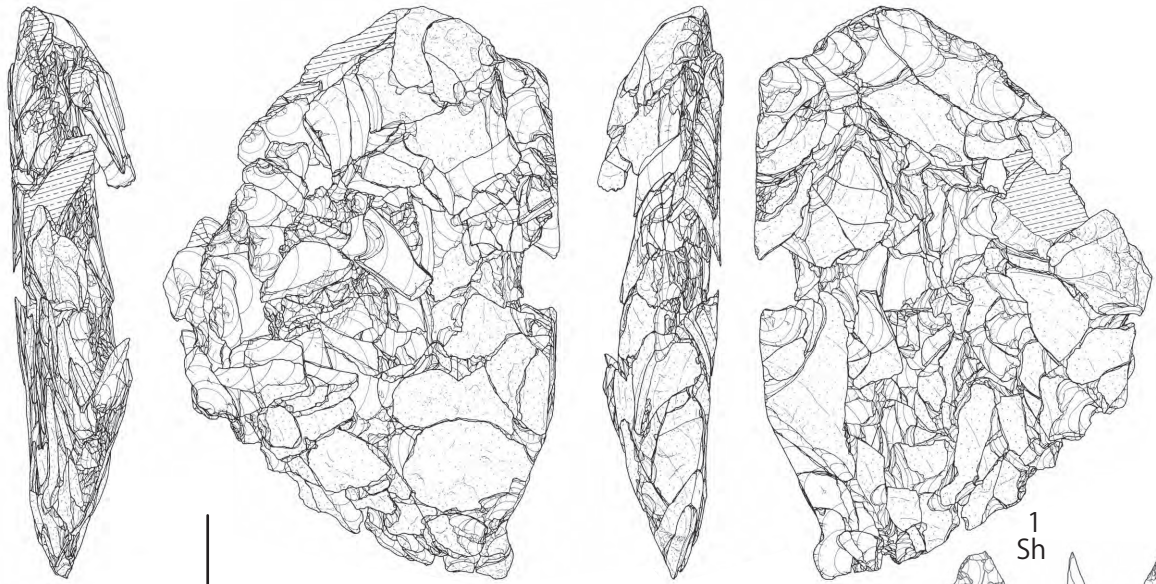
そこで、本研究では、基本的な情報の整理から始めることにしたい。円筒下層式期の石槍について、時間的空間的な位置づけを行う。それらの情報を整理することで、最終的に石材産地の偏在化は、当時の石槍生産にどのような影響があったのか、議論したい。

2 円筒下層式期石槍研究の課題と分析視点

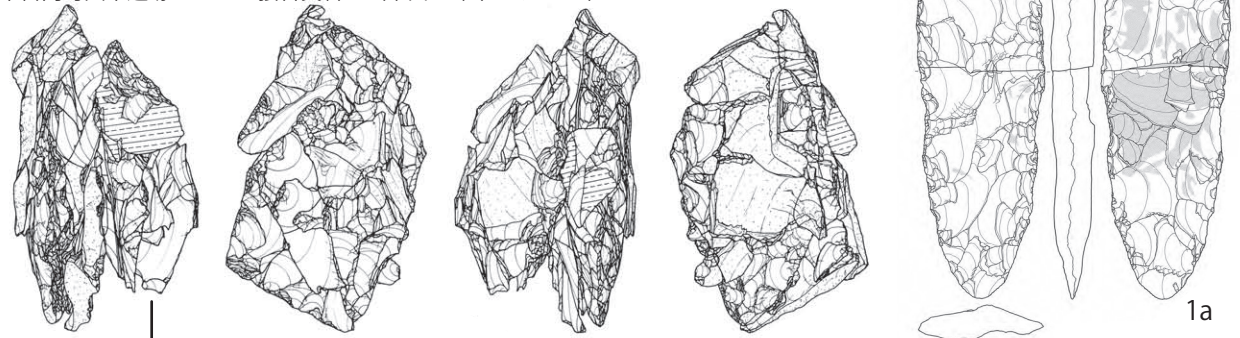
円筒下層式期における石槍研究は、十分に進められているわけではない。円筒土器が設定される際に、石槍が共伴石器の一つとして挙げられている（長谷部 1927）。その後、日本列島の縄文時代前期のなかでも「円筒下層系文化圏」における石槍の組成率の高さが指摘されるようになる（渡辺 1969）。渡辺誠は、その背景にまで言及し、石鏃の大型化と合わせて、他地域との動物相の違いを指摘し、カモシカやツキノワグマの捕獲と石槍の使用が密接にかかわることを示唆している。

また、工藤竹久（1975・1979）は石槍を中心

木古内町大平遺跡 FC-50 接合資料 11 (中山・鈴木ほか 2017)



木古内町大平遺跡 H-43 接合資料 3 (中山・鈴木ほか 2016)



山田(2)遺跡 遺構外 (小田川・小山ほか 2011)

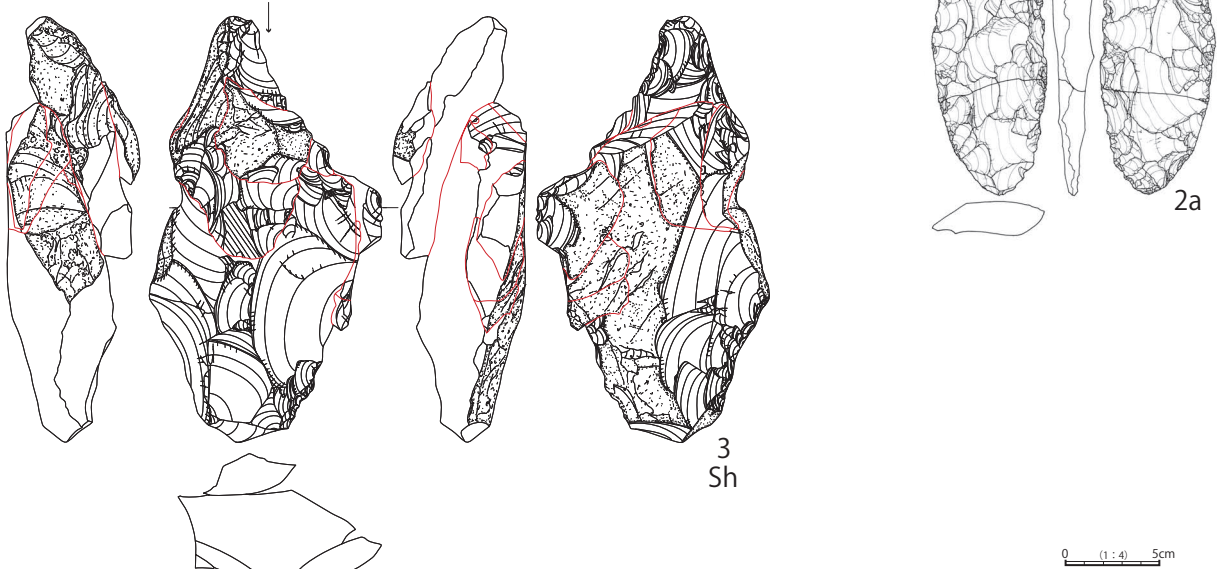
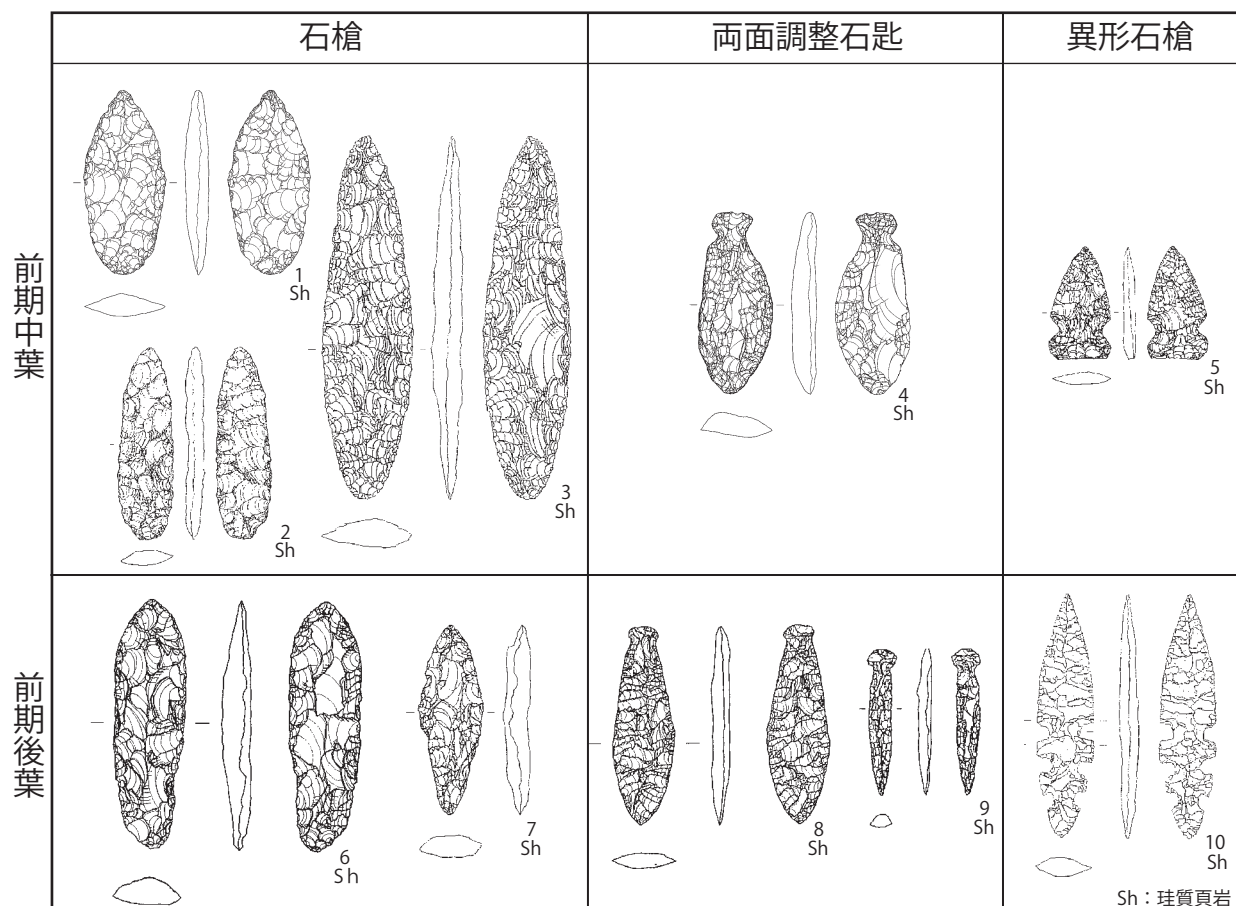


図1 円筒下層式期の石槍生産を示す接合資料とその浪費性



1・4：狼穴Ⅱ遺跡 ST15（柴田ほか 2010）、2：はりま館遺跡 EⅢ区 SI55（小林ほか 1990）
 3：池内遺跡 ST156 谷・Ⅲ層（櫻田 1999）、5：山館上ノ山Ⅰ遺跡（第2次）ST220（柴田ほか 1991）
 6：池内遺跡 SKS431（櫻田ほか 1997）、7：池内遺跡 ST396・504 谷・Ⅱ層（櫻田 1999）、8：池内遺跡 SKS386（櫻田ほか 1997）
 9：山館上ノ山Ⅰ遺跡沢Ⅰ（櫻田・小畑 1988）、10：池内遺跡 ST642（櫻田 1999）

Sh：珪質頁岩
 0 (1:4) 5cm

図2 円筒下層式期の石槍・両面調整石匙・異形石槍（出羽山地北部）

とした縄文時代の狩猟具の集成的な研究を行っている。そのなかで、石槍の各時期の形態的特徴がまとめられ、縄文時代前期になると、早期に比べて一遺跡で多量の石槍が出土しなくなるが、大型品（長さ 110mm 以上）が、目立つようになる点が指摘されている（工藤 1979）。

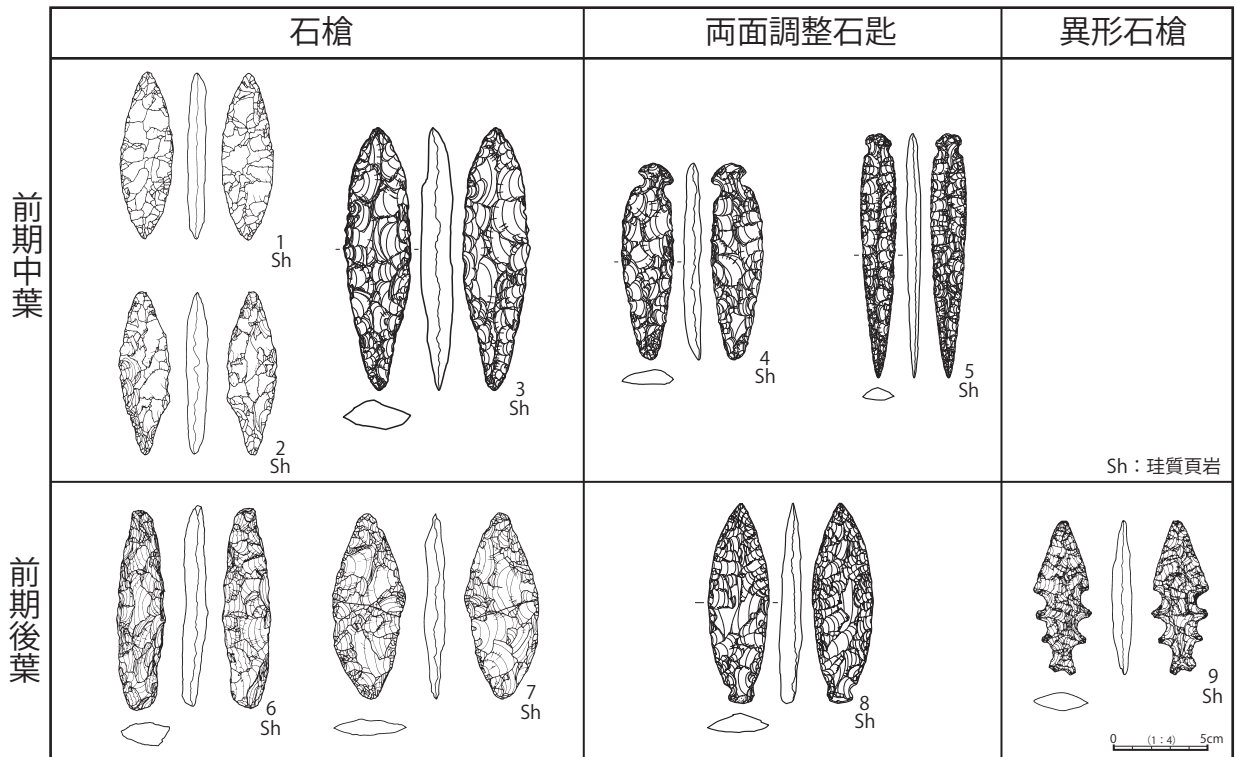
その後、青森県内の「異形石槍」の技術的形態的特徴が整理される（齋藤 2010）が、石槍生産をめぐる議論はなおも低調である。

石槍の生産をめぐるのは、生産地と消費の関係（齋藤 1998・2018）がわずかに言及されるに過ぎない。そこでは、「円筒土器文化圏にあって石槍もしくはナイフ、そして両面加工石器と呼ばれる石器は、他器種製作の石核としての役割を背景

にして、その石材である珪質頁岩の産地と消費地との関係に位置づけられる石器である。」（齋藤 2018：84 頁）として、石槍には石核としての役割があることやそれらが珪質頁岩産地から各地の消費地へと広がっていくことが指摘されている。

こうした指摘がなされる程度で、具体的な資料をもとに検討されていない。そこには、石槍生産を論じるための接合資料の乏しさが影響していることは大いにあるが、石槍を集成し、製作に係わる未成品を抽出していく必要がある。「両面調整石器」として、石槍の未成品の可能性が指摘されているものの（齋藤 2018）、それらの分布等までは論じられていない。

そればかりか、石槍が「象徴性」や「自己顕示」



1・2: 大面遺跡 (一町田・小笠原 1980)、3: 沢部 (2) 遺跡 SI59 (岩井ほか 2003)、4・5: 沢部 (2) 遺跡捨て場 (岩井ほか 2003)
 6・7・9: 山崎遺跡 A 地区遺物包含層 (一町田・菅田 1982)、8: 山田 (2) 遺跡 B 区 160 号土坑 (小田川・小山ほか 2011)

図3 円筒下層式期の石槍・両面調整石匙・異形石槍 (津軽半島)

(安斎 2007・2010)、「威信材や儀器」(大工原 2019)の側面と結びつける議論が多く行われている。これらの側面を評価してくためには、そもそも石槍がどのように製作されているのか、といった観点から明らかにする必要があるのではないだろうか。

こうした「象徴性」や「威信材」としての側面をめぐる議論はともかく、本研究では、東北地方北部の円筒下層式期の石槍に焦点をあてる。それらの資料を集成し、時期的地域的特徴について検討する。これらを踏まえ、石槍の生産とその広がりについて予察的に検討したい。

3 円筒下層式期における石槍の特徴

(1) 分析対象地域の設定

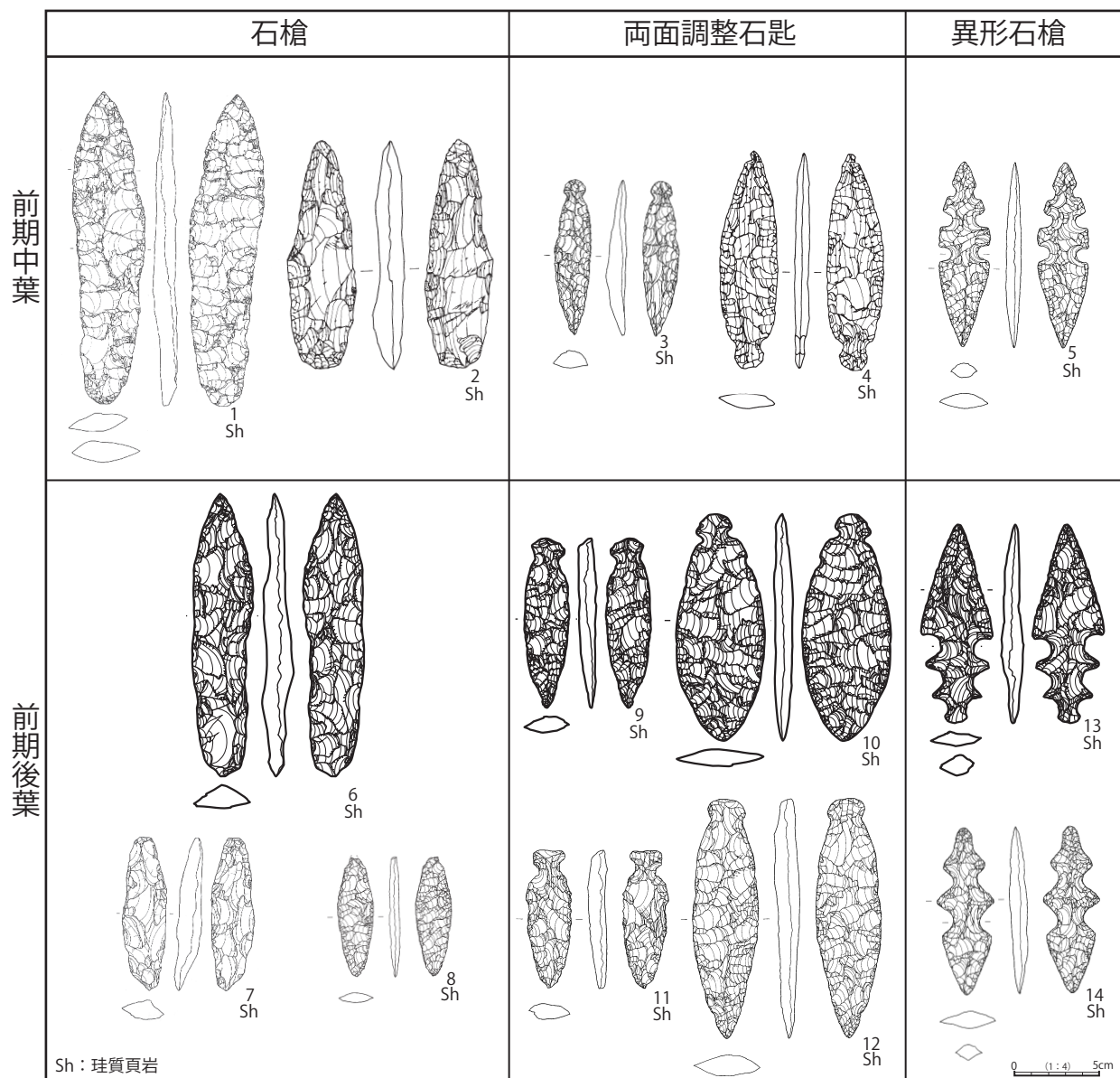
本研究では、東北地方北部を分析対象地域として設定する。先述したように、主に石槍を対象として、石材産地の偏在化と石槍生産との関連性を

議論することを主眼としているため、当該地域を対象とする。

当該地域の細分については、地形的な情報を重視し、小池ほか(編)2005に基づくこととする。当該地域の西側から時計回りに見ていくと、①出羽山地北部(花輪盆地、大館盆地、森吉・大平山地、秋田平野、男鹿半島)、②津軽半島(白神山地、津軽山地、津軽平野)、③青森平野、④下北半島(恐山山地、下北丘陵、陸奥平野)、⑤上北平野(八甲田・十和田山地を含む)、⑥北上山地北部(北上山地北部、九戸丘陵・台地、八幡平山地)の6つの地域に細分した。①は、秋田県北部に該当し、②～⑤は青森県域、⑥は、青森県の一部と岩手県北部に該当する地域である。

(2) 分析対象資料の設定

石槍は、両面調整により柳葉形や木葉形を呈する石器である。分析対象として、石槍の変遷を読



1: 三内丸山遺跡第6鉄塔地区VIa層 (岡田・中村ほか1998)、2・4: 熊沢遺跡捨て場 (鈴木1978)、3・5: 稲山遺跡第22号住居 (小野2003)
 6: 石江遺跡DSK-4025 (山田・神2008)、7: 三内丸山遺跡第127号住居 (岡田・成田ほか1998)、8: 稲山遺跡第26号住居 (小野2004)
 9: 石江遺跡DSI-24 (山田・神2008)、10: 石江遺跡DSK-6095 (山田・神2008)、11: 稲山遺跡第1252号土坑 (小野2003)
 12: 稲山遺跡第1401号土坑 (小野2003)、13: 石江遺跡DSK-6160 (山田・神2008)、14: 稲山遺跡第579号土坑 (小野2003)

図4 円筒下層式期の石槍・両面調整石匙・異形石槍 (青森平野)

み解いていくために、時期判断が可能な資料を中心に扱う。ただし遺構外出土資料や包含層出土資料であっても単一時期の土器群が出土していると確認できた場合は分析対象に含め、590点 (①出羽山地北部: 170点、②津軽半島: 165点、③青森平野 45点、④下北半島: 142点、⑤上北平野: 15点、⑥北上山地北部: 53点) の石槍を集成した。

さらに、石槍の製作技術と共通する異形石槍及

び両面調整の石匙にも目を向けることとしたい。異形石槍 (齋藤2010) は、石槍に対して複数の挟りが入れたもので、「多段挟入石槍 (異形デザイン尖頭器)」 (大工原2019) とされてきたものである。両面調整石匙は、両面加工が施され、基部側につまみ部があるもので、これまで「有撮石器」 (大野ほか1988) や「両刃石匙」 (秦2010)、「押出型石匙・石槍」 (大工原2019) と

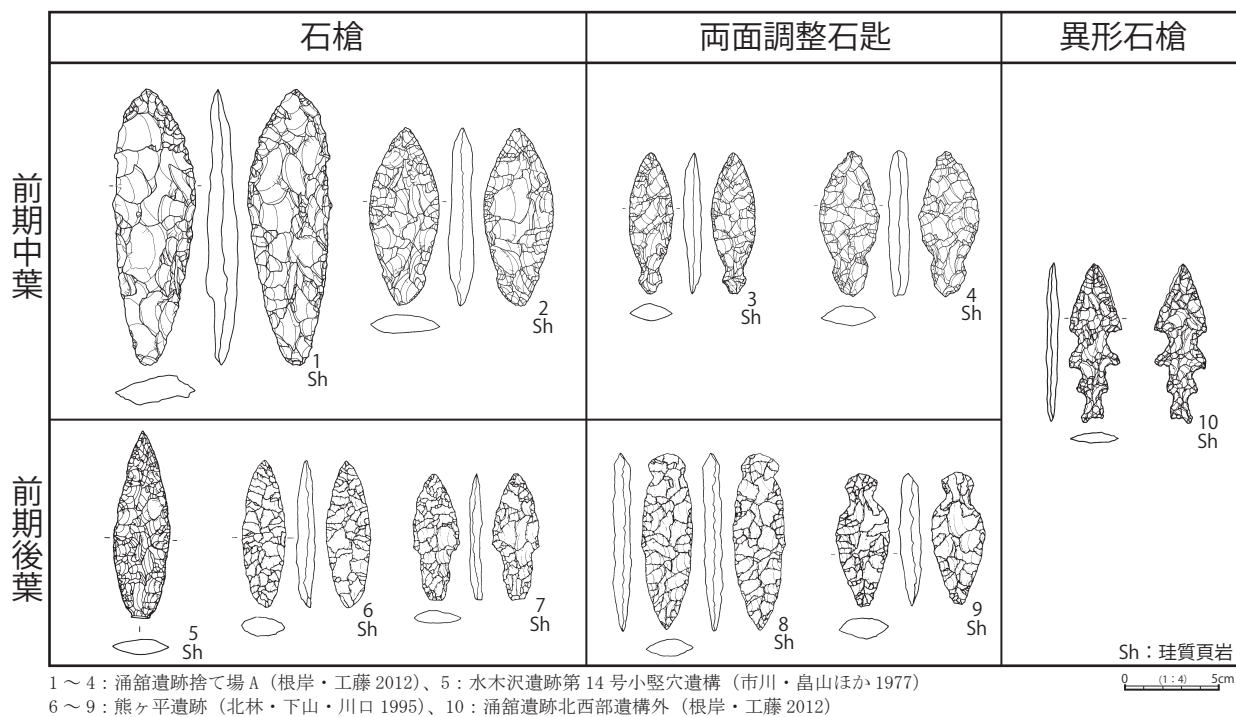


図 5 円筒下層式期の石槍・両面調整石匙・異形石槍 (下北半島)

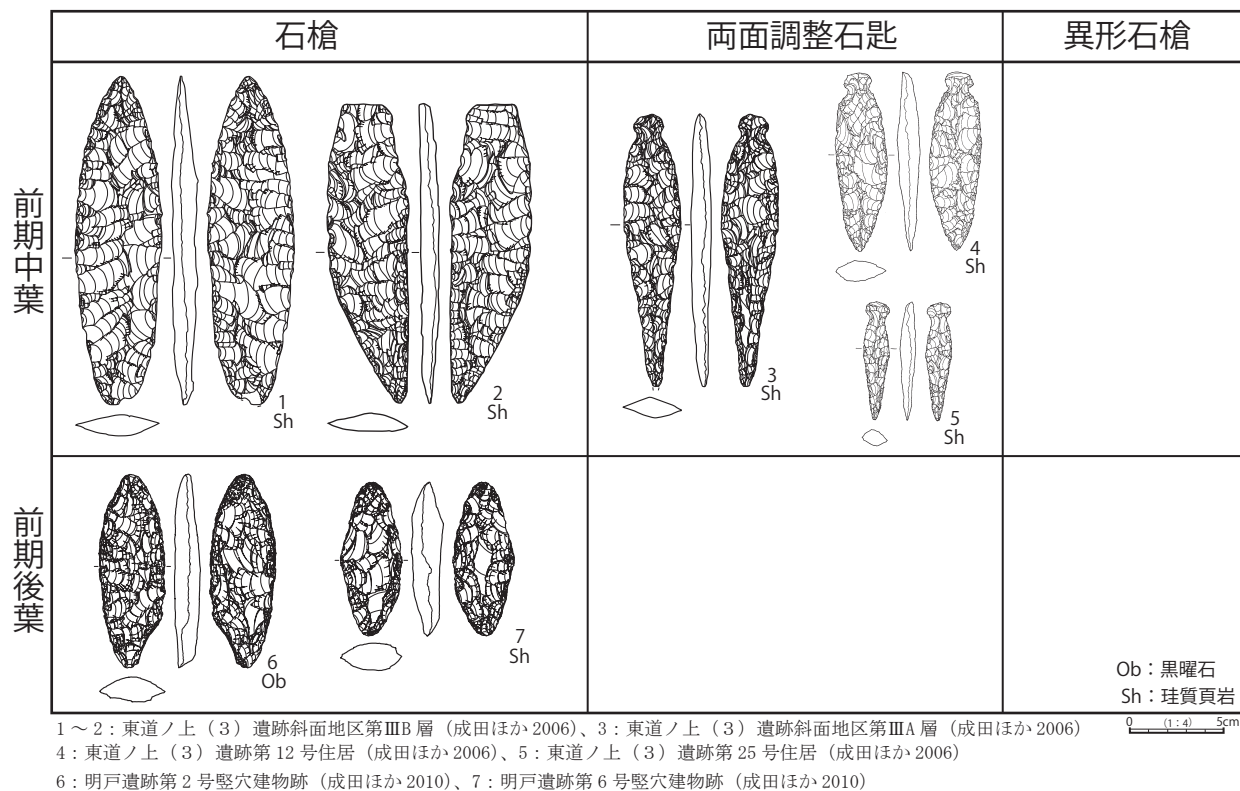


図 6 円筒下層式期の石槍・両面調整石匙・異形石槍 (上北平野)